

〈論 文〉

チャルコの農民, フリオ・ロペスの反乱<sup>1)</sup>

山 崎 眞 次

キーワード

チャルコ, フリオ・ロペス, 農民反乱, プロティノ・ロダカナティ, 社会主義, 無政府主義

Resumen

Cuando México logró la independencia y empezó a construir una nación nueva a principios del siglo XIX, el número de rebeliones campesinas aumentó en todo el país. Sugerimos que una causa del aumento de las rebeliones emana de la relación relativamente estable de tres actores (gobiernos, hacendados y campesinos) durante la época colonial que se convirtió en una relación inquietante. La alianza entre los gobiernos y los hacendados se reforzó para ganar más tierra y obtener más uso del agua y pasto, aislándose el sector agrícola. Para probar esta hipótesis, este artículo analiza la rebelión ocurrida en Chalco en el siglo XIX. El líder de esta rebelión es Julio López, un peón de una hacienda. Los estudiosos han tenido interés por Julio López porque éste se alzó contra los hacendados influenciado por la idea socialista de Carlos Fourier y las ideas anarquistas de Pierre Proudhon y Mijail Bakunin. En aquel entonces no había ninguna rebelión basada en dichas ideas en México. Entonces ¿por qué un campesino simpatizó con ideas socialistas y anarquistas? Hasta hoy día las monografías que han sido publicadas, están fundadas en las firmes influencias de las ideas de Fourier, Proudhon y Bakunin. Sin embargo, hay unos artículos que nieguen dichas influencias.

El primer investigador que empezó a analizar el caso de Julio López fue José Valadés, quien afirmó en un artículo publicado en 1924 que la rebelión de López era anarquismo. Después varios historiadores e ideólogos han hecho públicas sus opiniones como Díaz Ramírez (1936), García Cantú (1969), John Hart (1976), Leticia Reina (1976), Marco Antonio Anaya (1998) y Romana Falcón (2002) basándose en el dictamen de Valadés. Pero John Tutino (1990) analiza que López se rebeló, aprovechando la situación debilitada del Estado para reivindicar la tierra comunal de los campesinos.

En este artículo, primero, voy a presentarles la historia de Chalco y luego, examinar la rebelión misma y la infiltración de los pensamientos socialista y anarquista en México, y finalmente les presento mis conclusiones.

## 初めに

19世紀のメキシコにおける農民反乱の激増は、植民地時代から続くアセンダド（大農園主）による土地強奪や搾取、人口増加による土地不足、連邦政府が1865年に公布した「永代所有財産解体法」（レルド法）による土地喪失、白人と先住民間の人種対立の4つが主要因であると主張されてきた。だがそれら4要因に加え、土地所有権に関して政府、アセンダド、農民の3者間の均衡が崩れたことも紛争激増の一因であろう<sup>2)</sup>。安定した三角関係が歪な2極間関係へ変質したのである。

これまで3者間の関係変質についてメキシコの他地域での調査研究を行ってきたが、本稿もその一環であり、今回はメキシコ市郊外に位置するチャルコ地域における農民反乱を分析する。チャルコの反乱の指導者はフリオ・ロベスという、アシエンダ（大農園）のペオン（小作人）である。ロベスが研究者から注目されてきたのは、彼がシャルル・フーリエの社会主義的理念、ピエール・ブルードンとミハエル・バクーニンの無政府主義に影響を受け、アセンダドに対して武装蜂起したと言われているからである。当時のメキシコにおいて社会主義的、無政府主義的思想に依拠して反乱を起こした例はない。ではどうしていち農民であるロベスが当時のヨーロッパ思想に共鳴したのか。これまでフリオ・ロベスに関する研究はフーリエ、ブルードン、バクーニンの思想の影響を前提として論じられてきたが、ロベスがフーリエの自由と秩序を調和させるファランジュの思想やブルードン・バクーニンの無政府主義思想に通じていたという文書はないと、ロベスの反乱とこれらの思想家との関連性を否定する研究論文もある<sup>3)</sup>。

ロベス研究の先鞭をつけたのはホセ・バラデスである。バラデスは1924年に発表した小論文でロベスの反乱を無政府主義と断じた<sup>4)</sup>。その後のロベス研究はバラデス論文に依拠して発表された。ディアス・ラミレス（1936年）はチャルコの農民反乱を社会主義的共産主義と考え、ガルシア・カントゥ（1969年）はキリスト教的無政府主義、ジョン・ハート（1976年）は社会主義と無政府主義のカテゴリーに農地改革主義を加えた。レティシア・レイナ（1976年）とマルコ・アントニオ・アナヤ（1998年）は農地社会主義、ロマナ・ファルコン（2002年）は農地改革主義と見なしたが、ジョン・トゥティノ（1990年）は、チャルコの農民は弱体化し分裂したかに見えた国の政治・経済エリートの状況を失地回復の機会だと捉え、反乱したと分析した<sup>5)</sup>。

本稿では、まずチャルコの歴史を述べ、次にロベスの反乱を検証した上で、フーリエ、ブルードン、バクーニン思想の導入と影響を明らかにし、最後に結論を提示する。

## 1. チャルコ

現在のメキシコ市はかつて湖であった。北方から渡来したアステカ族は、1325年頃、メキシコ盆地の中央を占めるテスココ湖にあった小島に定住した。その後小島周辺を埋め立て、土地を拡張し帝国の首都テノチティトラン（現在のメキシコ市）を建設した。現在は湖が埋め立てられ当時の面影はほとんど残っていないが、市南部のソチミルコは運河を利用した舟遊びの場所として今でも観光客の人気を集めている。市南東部に位置するチャルコは、かつてはテスココ湖につながるチャルコ湖を介してソチミルコやメキシコ市と結ばれていた<sup>6)</sup>。チャルコ湖周辺からイスタシワトルとポボカテペトルの両火山の麓に広がる平原にはチャルコをはじめ、トラルマナルコ、

テナンゴ、アメカメカ、チマルワカン等の集落が点在している。チャルコ湖には魚類、軟体類、甲殻類、両生類が豊富で、鶴、家鴨、雁、ペリカン等の鳥類の生息地や渡来地でもあった。20世紀初めまでは古代の運河を利用してチャルコからメキシコ市まで農産物が運ばれていた。チャルコはアステカ王朝時代からスペインの植民地時代を経て20世紀初頭のメキシコ革命まで湖を利用した水上交易の要衝であった。チャルコは水運の便に恵まれていただけではない。メキシコ盆地の南東部という立地条件によって盆地外に続く東部のプエブラや南部のモレロスにつながる陸上交通の要でもあった。プエブラ地方のトウモロコシや小麦と亜熱帯気候のモレロス地方で生産される砂糖、蜂蜜、果実がチャルコに集積された後、舟でメキシコ市に移送されたのである。また、チャルコは農業の盛んな地でもあった。イスタシトルとポボカテトルの両火山の融水が流れ込み、チャルコ低地には無数の川が形成された。火山から運ばれる水は養分に富み、チャルコ一帯を肥沃な耕地にした。この沃野には先スペイン期にはトウモロコシ、豆、カボチャ、アボガドが栽培され、植民地時代にはスペイン人が小麦、リンゴ、ナシ、マルメロ、モモ、イチジク、クルミ、スモモを導入した<sup>7)</sup>。周辺の山地に広がる森林には杉、檜、松、樅、サイプレスが茂り、伐採された木材は建築資材、舟建材、薪、炭として地元やメキシコ市に供給された。

このようにチャルコは交通の要路、農作物生産地、木材供給地として古代から重要な地位を占めた。植民地時代に利用価値のある土地をめぐる紛争が先住民とスペイン人入植者の間に起こるのは火を見るよりも明らかであった。征服直後の1524年に創設されたメキシコ市の聖フランシスコ修道院は、修道院建築に必要な木材や燃料用の薪をチャルコの森から供給される権利を獲得した。チャルコ、トラルマナルコ、ミルパの先住民たちは同修道院に建材と薪を取めている<sup>8)</sup>。首都の拡大に伴い建材と燃料用薪の需要が上昇し、メキシコ市周辺の森林が浸食されたので、1538年、木材の伐採に関する禁止規定が発令された。不法な木の伐採者に対しては罰金が科せられ、その半分は市に収められ、残りの半分は告発した役人のものとなった。だが、不法伐採に歯止めをかけることはできなかった。そのため伐採地域が限定され、まず、首都から10レグア（1レグアは約5.6km）地帯が伐採禁止地区となり、さらに15レグア以内が禁止区域に指定され、チャルコ地方も含まれた<sup>9)</sup>。チャルコ地方では先スペイン期に建設されたアヨツィングの船着き場が水上交通の要となっていた。先住民チャルコ族は植民地初期には船着き場を中心とする交易ルートの権益を守った。だが、17世紀にアウグスチヌス会が王室からアヨツィングの船着き場の権利を獲得したことによって先住民の船着き場の権利が脅かされることになった。アウグスチヌス会は独占権益を守るため新たな船着き場の建設を妨害した。1634年、既存の船着き場を所有するウイツルシングの先住民たちは、船着き場の賃貸をめぐりアウグスチヌス会と訴訟になり、アヨツィングの修道院長は修道会を支持したが、訴訟は先住民側に有利な判決が下された<sup>10)</sup>。

メキシコ中央高原の先住民は主に疫病の頻発によって征服直後の1,100万の人口が1690年には120万人へと十分の1に激減した<sup>11)</sup>。そのため植民地政府はレバルティミエント制（先住民の割り当て制度）を導入して労働力を補充しようとしたが、先住民は拒否した。人口の少ない先住民に発言力があつたのである。チャルコの先住民農民も政府が要求した労働力の派遣を拒否している<sup>12)</sup>。この人口減少傾向が増加傾向に転じるのは18世紀後半である。1743年の『地誌報告書』によれば、チャルコには46の先住民共同体が存在し、先住民たちは農業、漁業、運搬人（馬子）、舟の漕手として様々な経済活動に従事していたことがわかる。1769-1770年の『地誌報告書』には1743年より12村増えたことが記載され、18世紀後半の人口増を証明している。新村は既存の

村の一部であったバリオ（地区）がアシエンダから土地を取戻し村に昇格したものである。前述の2つの『地誌報告書』を比較すると、1743年から1769-1770年までに全人口は5,026人から7,983人へ増加している。その内、先住民は、4,754人から6,836人へと30%増加し、非先住民（スペイン人、メスティソ、ムラト）は272人から1,147人へと大幅に人口が増え、27年間に急速な人口増が見られる。1743年に存在した46村のうち30村が先住民の村、16村は人種混合村であるが、1770年には純粋な先住民村は20に減少し、混合村が23に増えた<sup>13)</sup>。統計からチャルコに外部から人が移住し、先住民とスペイン人やメスティソとの混血化が進行していることが明らかである。

人口増に起因し18世紀後半には、水・土地の権利と森の使用権をめぐる先住民とアセンダド間の裁判が増加し、新たな村が生まれた。サンファン・アツァクアロヤがバリオから村へ昇格した事例はその好例である。1791年、ディエゴ・アレホ・ドミンゴが所有していたサンタ・クルス・アシエンダの一部が村の所有となり、サンファン・アツァクアロヤはバリオから村へ昇格した。この土地は1789年からサンファン・アツァクアロヤ村の所有とされていたが、1791年、ハラ伯爵がアツァクアロヤの住民に土地600バラ（1バラは83.59cm。1バラの長さの竿が土地の測量に用いられた）を奪われたと裁判所に訴えた。判決は村所有を認めたが、1793年、裁判所は、申請された600バラの住民の土地はなかったと、判決を覆し、村はバリオに逆戻りした。それに対して村人は控訴し、同年サンファン・アツァクアロヤ村に土地は戻された<sup>14)</sup>。1776年、チャピング・アシエンダ周辺の農民は、アシエンダに帰属する森林で薪用の木を伐採した際に、アシエンダ側に使用料を要求されたので、旧来の木材伐採権を主張し裁判所に訴えたところ、裁判所は農民に有利な判決をくださった<sup>15)</sup>。以上のアセンダドと農民の種々の紛争はチャルコ周辺の例であるが、同様の紛争は植民地全体で起こった。植民地時代、裁判所はアセンダドと農民間の訴訟に関してアセンダド側に有利な判決を下す傾向があったが、それでも比較的中立的立場を保ち、調停機能を果たしていたと言える。

## 2. 反乱の兆し

1824年憲法は、メキシコ連邦共和国を20の州と4つの直轄領に分割し、チャルコはメキシコ州の1自治体となった。1827年、メキシコ州の州知事に選任された自由主義者のロレンソ・デ・サバラは回顧録の中で、不公平な土地配分によって日雇い農民は惨めな状況におかれ、その5分の3は粗末な掘っ立て小屋に住み、文明の原則に悖る野蛮な生活を送っていると嘆いている<sup>16)</sup>。農民の窮状を懸念したサバラは1833年、モンテレオネ公爵の不動産を接収し、メキシコ州の農民に分配した<sup>17)</sup>。1849年、メキシコ州知事のマリアノ・アリスコレタはアセンダドから不当に農民共同体の土地を奪われたというハナカテルコ村の訴えに対処しようとして、不在アセンダドたちをメキシコ市に招集して、アシエンダに帰属しない係争中の土地を農民に付与しようとした。その提案に対して、アセンダドたちはそのようなことをすれば、要求がエスカレートし、反乱が起こるとして反対した。アセンダドたちは知事の提案を否認し、アシエンダを守るために武装し、お互いに助け合うことを決定した。農園主たち、アンドレス・キンタナ・ロー、マリアノ・イカスバルセタ、ガブリエル・デル・イエルモ、フランシスコ・イトゥルベ、イグナシオ・コルティナ・チャベスの圧力に屈し、知事は辞任に追い込まれた。同時期にキンタナ・ローはアルモロヤ村と

もウエホカルの水利権をめぐり対立した。裁判所はキンタナ・ローの勝訴としたが、村民は納得せず、非武装で道路に横たわり通行を妨げ湧水地までの進路を阻んだためにキンタナ・ローは湧水地を確保できなかった。キンタナ・ローは知事のアリスコレタに軍隊を派遣するように要請したが、知事は軍隊が撤退すれば同じ妨害行為が繰り返されるから軍隊の派遣は無意味であると回答した<sup>18)</sup>。

アセンダドがこのような強硬な手段に訴えるのは、彼らが経済的に疲弊したことに加え、農民労働人口が減少したからである。独立戦争によってメキシコ社会は大混乱に陥った。スペインとメキシコ両軍による徴発と襲撃によってアシエンダはその機能を低下させ、放棄されるアシエンダも出た。さらに米墨戦争がアセンダドの衰退に拍車をかけた。一方、1833年と1850年にチャルコではコレラが流行し、植民地末期に上昇傾向にあった農民人口増加は鈍化した。農民は人口減少によってアシエンダとの労働交渉において優位に立った。そのため日雇い労働者の日当は植民地時代の2レアルから3レアルへと上昇した<sup>19)</sup>。1849年、リバ・パラシオが所有するアスンシオン・アシエンダでは、共有地の農民が彼らの収穫が終了するまでアシエンダで働こうとしなかったために、収穫が遅れた。アスンシオンの管理人はアシエンダの住人8名が罹患し、2名が死亡したと報告している。疫病が流行すると、十分な労働者を確保できず、耕地は放棄された。チャルコ農民は疫病で人口が減少したが、労働力を必要とするアシエンダとの交渉力は増した<sup>20)</sup>。

米墨戦争(1846-1848)の敗北によってエリートの経済的衰弱は深刻となり、何らかの改善策への着手を迫られた。チャルコでは1849年から1856にかけて収穫を上げ収入源を確保するために牧畜と新しい水利技術の導入が試みられた。6つのアシエンダが牛乳製造に乗り出した。牛乳製造には人手がかかるが、乳牛を購入し、アルファルファを作付した結果、牛乳販売は定期収入を増やし、高利の貸し付けの必要性が減じた。また、牧畜は灌漑を必要としたので、アセンダドは水の供給を確保しなければならなかった。アスンシオン・アシエンダは1849年、外国人技師の指導によって新堰と灌漑堤防を建設し、また地下水の探査も行った。しかし、このようなアセンダドの水利事業は農民共同体との新たな紛争を誘発し、農民共同体との関係を悪化させた<sup>21)</sup>。

経営が逼迫したアシエンダはその打開策のひとつとしてアパルセリアという制度を発案した。アパルセリアとはアシエンダが共同体の農民に土地を貸し、農民は借りた土地を耕し、その結果生まれた収穫を両者で折半する制度である。分益小作契約とも呼ばれる。アセンダドは自前の労働力を供給する必要はなく遊休地を貸すだけで、豊作であれ、不作であれ、収穫の半分を手にすることができた。だが、小作農民は不作のとき、提供した労働に見合うだけの果実を手にはできなかった。それでもチャルコの農民がアパルセリアを受け入れたのは、農地の管理裁量権があり、最低限の食料が入手できたからである。アパルセリアはアセンダドの切迫した問題を多少は和らげた。チャルコではアスンシオンで1856年に実施された。アセンダドはアパルセロ(分益小作人)と利益を分担するようになっていた。アパルセロは個人農家ではなく共同体の農民であった。豊作の年は問題ないが、不作のときは、飢餓に苦しみ痩せた非灌漑地を耕作させたアセンダドへの不満が募った。アセンダドは地味豊かな土地で収穫できていたからである。アパルセリアでの飢餓は自然災害ではなく社会問題であった<sup>22)</sup>。

1849年以降、中央や南部で一連の連携化しない広範な抗議が続発した。クエルナバカ、クアウトラ、チャルコを囲む低地は激しい闘争の舞台となった。農民は判決を無視し、国家に承認された所有権の尊重を否定し、賃料を払わず、労働意欲がなかったと記録されている<sup>23)</sup>。このような

緊張関係を解決するためにチャルコのアセンダドたちは州知事、地方長官、軍司令官と組織的に連携し、農民の不穏な動きを抑圧しようとした<sup>24)</sup>。

1849年、サンフランシスコ・アクアウトラの農民はソキアパンのアシエンダと水を巡り対立し、耕作地、牧草地、森林を失った。農民側は裁判に持ち込んだが、アシエンダに有利な判決が下されたので、実力行使に訴えた。農民が自分たちの所有であると主張する放牧地に放牧した家畜をアシエンダが捕捉し、その返還をめぐり小競り合いが元でアシエンダの管理人が死亡した。チャルコの地方警察隊が出動し、農民36名を逮捕し、不穏な動きを鎮静化したが、土地や水をめぐる根本的問題は解決されないままであった<sup>25)</sup>。1850年、アスンシオン・アシエンダはかつて農民共同体と共有していた水をトマココのアルファルファ灌漑地用に強奪した。1851年にはアメカメカの集落は、有利な判決を勝ち取ろうと古い訴訟を再開し、1855年まで続けた。同じく1850年、リバ・パラシオは堰を建設しチャルコ、テママトラを浸水させ、土地を占拠したので、農民たちは堰を破壊すると脅迫し、堰の上流に堤防を建設したが、最終的にアシエンダが灌漑地を耕作した<sup>26)</sup>。

1865年、チャルコ北西に位置するチマルワカンの農民は二人の地主が共有地の安寧を脅かしていると、マキシミリアン皇帝が創設した「困窮者保護委員会」に助けを求めた。ファン・フロレスという地主は共有地に帰属する土地を奪い、もう一人の地主フェリペ・ガルシアは村に水を供給する湧水地の土地を買い取り、村人の湧水地への接近を禁じた。委員会は、フロレスに対して村民に帰属する土地の返還を求め、ガルシアに対しては、共有地の伝統的水利権を尊重するように命じた<sup>27)</sup>。1868年3月、トラルマナルコの長官、フランシスコ・バスケスは州知事のリバ・パラシオに無法な反乱者たちが土地を分配すると約束して、農民を煽っていると報告した<sup>28)</sup>。このようにチャルコ地方では1849年以降、土地、水、牧草地をめぐるアシエンダと農民の紛争が絶えなかった。

### 3. フリオ・ロペスの反乱

メキシコの他地域の農民反乱同様、チャルコの反乱も1856年に公布された永代所有財産解体法（通称レルド法）の影響が大きい<sup>29)</sup>。レルド法の主目的は教会不動産の接収であったが、同時に、植民地時代から維持されてきた先住民共同体を廃止し、共同体の成員に共有地を分割した私有地を分配する法律でもあった。その意図は死蔵された共有地を私有化することによって土地の流動性を高め、資本主義経済を導入することである。農民は共同体の連帯基盤である共有地を解体されたことで、連帯意識が分断され、アセンダドとの土地や水・山野利用権をめぐる闘争が弱体化した。アセンダドはレルド法の公布でより早くより簡単により安く土地を獲得できるようになった。レルド法を公布した連邦政府にはアセンダドの土地寡占化を幫助する思惑があった。レルド法が農民共同体の解体を促進する法律であることは紛う方なき事実であるが、新国家建設直後から共有地の私有化は試みられている。1820年代、ハリスコ、ミチョアカン、プエブラ州など12の州で共有地の分割が承認された。だが、独立後の政治的混乱や経済的停滞によって連邦・州の権力基盤は脆弱で法律を施行するだけの強制力はなかった。自由主義派も保守主義派もフランス軍も治安維持のためにアセンダドに特別献金や強制的貸付を要求した。自由主義政権が国内を曲がりなりにも統一して初めてレルド法という強圧的法律を実施できたと言える。ファレスがマキシミリアン帝政を打倒し、政権を掌握した1867年までは権力の空白を利用して農民たちはある

程度、共有地を維持できたのである。フリオ・ロベスの反乱はまさしくファレスが権力者としてその地位を不動のものとした直後に起こった。

フリオ・ロベスの正確な生年はわかっていないが、1840年ごろ、チャルコのイスタパルカ区のサンフランシスコ・アクアウトラで生まれたとされる。アクアウトラ、コアテベック、ソキアパンのアシエンダのパオンとして働いた後、自由主義陣営に志願し、大佐の称号を得る。1865年にチャルコに設立された「光と社会主義」学校に出席し、文字、祈祷、社会主義の組織学と理念を学び、この学校で学んだ知見と経験を生かして二つの反乱を指揮した<sup>30)</sup>。

1867年末、フリオ・ロベスは連邦共和国大統領ベニト・ファレスに対して以下の宣言（エル・モニトル・レプブリカノ紙の抜粋）を発表し、チャルコ農民の窮状を訴え、土地問題に政府の適切な介入を懇願した。

大統領閣下。…何人も他者に奉仕するために生れたのではないと、言われています。…惰性的政党は犯罪的沈黙で悪魔的罪を許容しています。エゴイズム、卑劣さ、恥ずべき無知によって常に破廉恥な法を受け入れます。それ故、多くの民が貧しさに苦しみ、その中でも赤貧に打ちひしがれているのがわれらインディヘナであります。アセンダドに篡奪された祖先の土地所有権を主張いたします。…インディヘナの土地、水、山野の権利をご承認ください。それらを守るためなら、最後の血の一滴まで流す覚悟であります。裁判所巡りにはほとほと疲れ果てました。幾多の犠牲を払い、何年も問題を提起してきましたが、アセンダドへの依怙最良や屁理屈は目に余るものでした。金と時間の無駄でした。貧しい住民を慈悲の目でご覧ください。アセンダドはわれらのもので楽しみ、富を蓄えましたが、それで満足しないばかりか、われらを貪り、破壊し、滅ぼそうとしています。アセンダドに奪われた土地が一刻も早く住民の手に戻るように適切な措置をお取りいただきたい。政府が早急に措置を取られない場合は、武力でわれらの土地を取り戻すために反乱するつもりです。…カスタ戦争のレッテルを張らないで頂きたい。われらの政府に戦争をしかけるつもりは毫もなく、われらは政府の忠実な支持者であり、将来もそうあり続けるものです。…憲法はわれらにすべての保証を明白に謳っています。憲法第1章第7条はいかなる件であれ文章を執筆し発表する自由は侵害できない、と言い、また、第8条は平和的かつ丁寧な手段で執筆された嘆願書の権利は侵害されないと、言っています。

独立、自由、祖国、民の声。1867年12月31日。<sup>31)</sup>

ファレスはこの宣言にどのように対応したかは史料が残されていないので、推量の域を出ないが、恐らく、苦々しい思いで読み捨てたのではないと思われる。ファレスがロベスの調停要請を拒否したことから<sup>32)</sup>、ロベスは反乱の準備を進め、仲間を募り始めた。ロベスの主な動きを国防省所蔵の軍報告書概要（1868年2月-3月）から追ってみよう。

2月18日。チャルコ長官：サン・マルティニト村で陰謀が発覚したので、50名の竜騎兵を要請した。

2月23日。フリオ・ロベスによって認められた書状（攻撃すると脅迫する）が司令官ゴンサレスへ渡される。

3月3日。ならず者たちを追跡するためにアブラハム・プラタ大佐にチャルコ地区への出動命令。

3月14日。ロペスからプラタ大佐への書状：アセンダドへの武装蜂起であって、政府が相手ではない。

3月18日。チャルコの長官がバラ軍の駐留を要請する。

3月19日。チャルコの長官：ロペスが25人の手下と（降伏のために）出頭し、手下たちは家に戻る。

3月20日。ロペスへ通行許可書の発行。

21日。バラ軍、首都へ戻る。1868年の軍報告書概要<sup>33)</sup>

軍の記録を読む限り、これは反乱というよりむしろお上に対する抗議・強訴と言えるのではないか。軍が出動し、武器を携帯した農民集団と衝突したが、深刻な事態には陥っていない。しかし、政府が土地の返還を解決していない状況でロペスが武器を置き投降したことを、素直に政府への恭順と受け止めるかは意見の分かれるところである。ロペスは1か月後に大規模な反乱を企てるからである。反乱の賛同者が予想より少なく、また、参加者から離脱者が出たことで計画が狂ったために、運動の立て直しと再編成を図るための時間稼ぎと考えることもできる。

では、次にチャルコの農民の動向について報道した首都の各紙の記事を見てみよう。エル・グロボ紙（1868年2月27日）は、「少数の盗賊団の頭、フリオ・ロペスという某が、富裕者のアセンダドに対して土地を先住民に分配せよと要求し、チャルコ地区の数か所を徘徊している」と伝えている。エル・グロボ紙（1868年3月6日）は、「ロペスは先住民にアシエンダの土地の分配と富者に対する戦争を宣言したが、改革戦争時と外国干渉戦争時に共和国兵士として奉仕したロペスに率いられた革命的行動は、地域の役所が後ろ盾となったアセンダドの専横に因を発する。メキシコ州の当局に彼らの大義を喚起したい。チャルコで起きていることは単なる混乱と見なすべきではなく、住民を苦しめる悪を根絶する措置を取るべきである」と農民の反乱を支持する記事を掲載した。エル・モニトル・レプブリカノ紙（1868年3月14日）は、「先住民たちの言い分に理はあるが、武装蜂起は秩序を乱し、カスタ戦争を国内に誘発する危険がある。チャルコで発生した危険な状況は、武力ではなく分別によって解決できないか」と先住民の反乱に一定の理解を示している。エル・シグロ・ディエシヌエベ紙（1868年4月2日）は、「反乱の首謀者フリオ・ロペスは17日（ママ）午後3時半、連邦政府の慈悲を求めて、彼の部下たちとともに武器を置いた」と追い詰められた反乱者たちが恩赦を求めて投降したと報道している。

新聞各社は、1868年2月から3月にかけては反乱の原因を探り、農民たちの正当性を支持し、ある程度公平な記事を掲載している。ロペスが略奪と暴力を固く禁じていたことも彼に好意的記事を書いた理由であろう。

しかし、軍報告書と新聞記事はチャルコの反乱では重要な役割を果たすラファエル・クエジャル将軍のことには触れていない。クエジャルは連邦政府の要請を受け、2月中旬に50名の兵を率いてチャルコ地区に進駐し、反乱者たちを追撃している。ロペスは3月12日、クエジャルと会談し、自説を主張したが、クエジャルは受け入れず、ロペス農民軍を追い詰めていった。チャルコの農民は反乱を支持しようとしたが、訓練を受けていなかったために軍隊との対決に生命をかけようとはしなかった。そのためチャルコの反乱では大規模な動員は生まれなかったと、リバ・パラシオ文書を調査したトゥティノは分析している<sup>34)</sup>。

しかし、4月の播種が終わると、ロペスは「メキシコ並びに世界のすべての非抑圧者と貧困者への宣言」を発表し、フアレス政府への全面的反乱を呼びかけた。



メキシコ市民よ！奴隷が人間として蜂起する日がきた。権力者によって踏みにじられてきた人間の権利を要求しよう。兄弟よ、畑から邪魔者を排除し、われらに要求してきた者たちから清算するときがきた。彼らの権利だけを欲してきた者たちに義務を課す日である。血を賭した闘いに出向こう。血を流すことなど何でもない。流す血はわれらの大地の糧となり植物が豊かに実るであろう。疲労、貧困、無知、暴政によって何年も何世紀も苦難の道を歩んできたことか。われらの額の汗、目の涙、腕の疲労、足の疲労、心の苦悩は誰のための利益なのか？収穫物をすべて強奪されることを考えたことがあるのか？われらの肉体的、精神的、知的弱点を利用したのは、アセンダドである。強奪されたのはプロレタリアートやペオンである。アセンダドはわれらペオンに大きな越権行為を行った。われらが人生を享受できないように搾取する制度を定めた。われらの両親は一日1レアルの労賃でアシエンダに買われた。1レアルでは生きていけない。アシエンダの市場ではわれらの手で生み出した品物を過剰な値段にわれらに売りつける。年々、借金は膨らむばかり。この世に生れ出た瞬間にすでにわれらは祖先の借金を負っている。奴隷のごとく、同じ場所で同じシステムの下、働かされる。…教会は偽善的使命感で現世ではなく精神的救済という嘘を紡ぐ。われらは悍ましい状況を救済してほしいがためにあらゆる聖人に祈りを捧げる。だが、すべては無駄である。彼らによれば、われらは嘆きの谷で苦しみ、来世で諦めを付与されることを待たなければならない。奇妙なことは、われらに諦めを説く者たちが苦しい存在に最も甘んじようとしなないことである。巨大な所有物を獲得し、われらの額の汗から豪勢に食した。司祭たちは偉大なキリストの教えを冒瀆しわれらを騙し、ユダの役割を果たした。教会ではなく宗教の支配を！司祭の支配など願ひ下げだ。司祭たちはトウモロコシの1粒1粒をわれらの罪を赦す代償として持ち去った。そしてアシエンダと結託しわれらを窮乏に追い込んだ。司祭が悪なら、支配する者はすべて悪である。…ファレスは共和国主義者であり、教会の敵であると言われているが、保守主義者で専制者である。すべての政府は悪である。であるから、われらは今あらゆる政体に対して反乱する。平和と秩序を望む。われらは土地を請い、ファレスはわれらを裏切った。耕す一片の土地も持てないのか？…アセンダドは帝国の庇護にあったので共和国の勝利は民の本当の勝利だと思った。だが、これらのアセンダドは共和国の庇護のもとに入った。…

われらは社会主義を望む。これは社会的共存の最も完璧な形態である。自由、平等、博愛の揺るぎない3理念を包含する真実と正義の哲学である。貧しい者を非難し、一方で富と幸福を享受する者がいる搾取の悪習を徹底的に破壊したい。搾取システムを廃止して、平和的に土地に播種し、平穩に収穫したい。年貢を払うこともなく、最も心地よい場所に播種するために、あらゆる人に自由を与えたい。最も適切だと信じられる集合形態の自由を与えられ、命令したり罰したりする者たちが必要ではない、共通の防衛のために監視される大小の農業共同体を形成する。われらは専制的なあらゆる政体を廃止し、博愛と互助の社会に生き、調和に満ちた普遍的共和国を確立する。…

追跡され蜂の巣にされるかも知れないが何ほどのことか。われらの胸には希望が脈打つ。政府と搾取の廃止を！社会主義、万歳！自由万歳！チャルコ、1869年4月20日<sup>35)</sup>

1867年末のファレスに向けた宣言文と内容も語調も全く異なる。前文が大統領に農民の窮状を訴え、行政の介入を仰いでいるのに対して、今回の宣言は、アセンダドと教会を非難するばかりか、

フアレスを裏切り者と糾弾している。激怒した社会主義者が武器を取り、土地を奪取したのである。特筆すべきはあらゆる政体を否定し社会主義を支持している点である。フリオ・ロペスの反乱にフーリエの社会主義とブルードンやバクーニンの無政府主義の思想が影響を与えていると論じられてきたのは、正にこの「メキシコ並びに世界のすべての非抑圧者と貧困者への宣言」の存在による。

では、宣言表明後のロペスの動きを軍報告書と新聞記事から追ってみよう。

軍報告書：

4月22日。ラファエル・クエジャル将軍：ゴメス大佐が100名の騎兵と出兵。

29日。チャルコ長官：州政府に50名の兵士の支払いを要請。ロペス、再び反乱。

6月2日。ホセ・マリア・バルガス大佐へ命令：ロペス盗賊団を追跡すべし。

6月9日。プエブラ州知事：ロペスがテスメルカンに侵入。

9日。カンフナー将軍、ロペス軍にリオ・フリオで敗北。クエジャル、ロペスの敗北を報告。  
プエブラ州知事：クエジャルがロペスを破る。ウエショツインコで逃亡者の逃げ道を塞ぐ。

11日。クエジャル：ロペスをアソルコ・アシエンダで攻撃し、3名が死亡。

12日。プエブラ州知事：サン・サルバドルから4レグア地点のロペス軍は100名。

13日。クエジャル、盗賊に対する作戦を報告。

18日。クエジャル：捕虜の移送。

20日。クエジャル：プエブラ州知事へ；ユカタンへ戦争捕虜の移送を要請。

アシエンダへ：捕虜移送費用の支払いを命じる。(ベラクルスの)広場に着き次第ユカタンへ乗船させるべし。

24日。エギルス将軍の軍隊はチャルコを平定し、トラルパンへ戻る。

既婚者の捕虜は解放するが、再犯した場合は厳罰に処す。

25日。クエジャルへの命令：メキシコ州知事が引き渡す12名の捕虜を受け取り、ユカタンへ移送すべし。

27日。捕虜は第5師団に徴兵。

28日。捕虜の14名がユカタンへの移送を拒む。

7月7日。ロペスをサン・ニコラス・デル・モンテで捕縛。

8日。アントニオ・フロレス大佐、ロペスの捕縛を報告。回答：法令に則り、処刑すべし。

9日。決議：ロペスの身元確認と処刑執行を確認。

13日。フランシスコ・エレリアス、ティブルシオ・リベラ、フリオ・カスタニエダと他4人を捕縛。回答：エレリアスとカスタニエダは裁判のために首都の司令部に送るべし。

18日。チャルコ長官：首都監獄に収監された2名の捕虜の扱いについて。決議：クエジャルに送り、ユカタンに送る捕虜たちに合流させよ。

22日。アデライド・アルナスの捕縛。回答：処刑。

8月3日。ファン・アカティトラとラモン・アルコスを放免。

9月3日。プエブラ州知事：明日、囚人はユカタンへ移送。

30日。プエブラ州知事、ユカタンへ行く囚人のベラクルスへの到着を連絡。

10月2日。ベラクルス州知事：囚人のユカタンへの乗船連絡。(1868年の軍報告書概要)<sup>36)</sup>

軍報告書には、連邦軍を率いるクエジャル将軍がロベス軍を徐々に追い詰めていく過程が記録されている。ロベスは7月7日に捕虜となり、翌日、国防大臣イグナシオ・メヒアの命令で処刑されている。トゥティノによれば、フアレスはロベスの処刑を承認し、捕虜の軍隊への徴兵とユカタンへの追放に対して恩赦を求める要望があったが、それらの要望を拒否した<sup>37)</sup>。連邦軍は捕虜を兵員補充のために強制的に入隊させ、また、ユカタンへ強制移送している。軍報告書には記載されていないが、これらの捕虜はユカタンのアシエンダに奴隷として売られたのである。当時、反乱した農民を捕虜とし、労働力が不足するアシエンダに人身売買することは習慣化していた。そのため、反乱に無関係な農民まで捕らえられ、売買される深刻な事態も発生していた。軍人にとって農民反乱は金になる捕虜を獲得する絶好の機会でもあった。軍報告書にはロベスの「宣言」に表明された社会主義という語彙は見当たらない。軍としては、社会主義者とか共産主義者といった思想犯ではなく、政府に楯突く盗賊団として反乱者を討伐したという見解であろう。では、新聞各紙はロベスの再反乱に関してどのように伝えたのであろうか。

エル・グロボ紙(6月1日)は「ロベスは約60名の手下を率い<sup>38)</sup>、いくつかのアシエンダを襲い、武器と馬を奪った」と報道し、エル・シグロ・ディエシヌエベ紙(6月2日)も「ロベスの盗賊団が再び現れ、プエナビスタ・アシエンダを襲い、すべての馬を略奪した」とロベスの略奪行為に言及し、今回の反乱が前回より過激化していることが紙面より窺える。ラ・レビスタ・ユニベルサル紙(6月4日)は「ロベスはアシエンダの土地を農民に分配した」とロベスがアシエンダから奪った土地を反乱参加者に分配したことを報じている。

ラ・オピニオン・ナショナル紙(6月16日)は「反乱はカスタ戦争や共産主義に陥っている」、エル・モニトル・レプブリカノ(6月17日)は「トゥニョン・カニエドがこれら先住民の共産主義者たちを鎮圧するために首都から出兵した」、エル・シグロ・ディエシヌエベ紙(6月20日)は「共産主義者のリーダーの力は衰え、今では6～8人の手下と山へ逃亡した。州知事のマルティネス・デラ・コンチャがチャルコに兵を率いて入り、政府軍との連携で輝かしい結果を出し、平和と秩序が回復した」と共産主義や共産主義者という言葉が紙面に踊っている。新聞はロベスの反乱の意図がアシエンダから奪回した土地の分配という共産主義的運動であることをある程度認識していたことになる。農民たちは共産主義について理解している者はほとんどいなかったが、支配者階級からみれば、秩序と所有権を脅かす状況を表現するには適切な言葉であった。

エル・グロボ紙(6月27日)：「収穫期にクエジャルとフロレスの兵が徘徊し、農民は仕事ができない。アセンダドはこの機を逃さず、裁判中の土地の権利を申し立て、お祝い気分だ。人々は罪を犯したこともなく、反乱に加担してもいないのに、憲法で守られた自由を奪われ兵役に駆り出された」、エル・モニトル・レプブリカノ紙(6月21日)：「チマルワカンではわれらを反乱軍の一味と見なした」、ラ・レビスタ・ユニベルサル紙(6月29日)：「憲法は遵守されず、種と馬が奪われ、徴兵された」、エル・グロボ紙(7月11日)：「テスココ長官フロレスの職権乱用がフアレスに報告され、フアレスは調査を命じた」と、各紙は反乱のどさくさに紛れて、軍が職権を乱用し、またアセンダドが不法な土地占拠を行っていることを告発している。

1868年2月～3月の記事には用いられなかった共産主義やカスタ戦争という語彙が使用され、

ロペスの「新宣言」に目を通した記者たちが、反乱を単なる農民の突発的土地回復運動ではなく、社会主義的・共産主義的思想が反映されたものと見なした。しかし、記事は一方向的に農民反乱を非難するのではなく、反乱を利用して農民を徴兵し、また捕虜を売買する軍隊の横暴ぶりとアセンダドの不法行為も書き記している。以上、ロペスが起こした2回の反乱の概要である。

#### 4. 社会主義と無政府主義の影響

1868年のチャルコの農民反乱が他の農民反乱と異なる点は、指導者のフリオ・ロペスがフランスの思想家シャルル・フーリエ（1772-1837）とピエール・ブルードン（1809-1865）、さらにロシアのアナーキスト、ミハイル・バクーニン（1814-1876）の影響を受けていたとされるからである。メキシコにフーリエとブルードンの思想を初めて紹介したのは、メルチョル・オカンボである。自由主義者のオカンボはニューオーリンズに亡命中、フランスの思想家の書物を紐解き、独裁者サンタ・アナ政権打倒の糸口にしようとした<sup>39)</sup>。そして、ブルードンの『貧困の哲学』第8章をスペイン語に翻訳した<sup>40)</sup>。だが、実質的にメキシコに社会主義思想と無政府主義思想を導入したのは、ギリシャ人、プロティノ・ロダカナティである。ロダカナティは1828年、アテネに生まれた。医者であった父の影響を受けウィーンで医学を学び、その後ベルリンでヘーゲル哲学に心酔する。1848年のハンガリー動乱に参加した記録も残っている。1857年、パリでブルードンに出会っているが、その後メキシコに渡るまでの期間、彼の足跡は判然としない<sup>41)</sup>。ロダカナティは、メキシコ大統領コモンフォルトが公布した移民促進法に触発されて<sup>42)</sup>、1861年2月、メキシコにやってきた。だが、その当時にはすでにそのプロジェクトは忘却されていた。ロダカナティは同年（1861年）、早速、シャルル・フーリエ主義の基本教材、『社会主義読本』を発行した。1863年には実践の場として「ファランステール」校を設立した。この学び舎にはその後のメキシコの社会主義と労働運動を担うことになるフランシスコ・サラコスタ、エルメンヘヒルド・ビジャビセンシオ、フアン・ビジャリアル、サンティアゴ・ビジャヌエバが参集した。1865年6月、サラコスタとビジャヌエバが関係した紡績・織物労働組合がストライキを実施したが、帝国当局によって直ちに鎮圧された。一方ロダカナティは、1865年1月、農業法に基づき封建主義を打破し所有の再組織化を図ることで国家との経済契約の解決を目指し、社会主義を導入するためにチャルコに農業コロニーの建設を開始した<sup>43)</sup>。このコロニーにサラコスタやビジャヌエバが合流した。ロダカナティが来墨した理由がメキシコ政府の推進した農業コロニーへの入植であったことを考えれば<sup>44)</sup>、彼の農村への移住は自然な成り行きであった。コロニー建設は実現できなかったが、読み書き、祈祷、社会主義を教える「光と社会主義」学校を建設した。そこにペオンのフリオ・ロペスが参加したのである。ロペスは少数の過激なインテリグループに感化され農民の権利を強く意識するようになった。だが、革命的暴力を否定し、目的達成には説得を採用するロダカナティは過激化する弟子や農民に違和感を覚え、チャルコを去るが、その後を継いだのがフランシスコ・サラコスタである。その後、ロダカナティは首都に戻り、1871年3月にその後のフーリエ主義者たちの活動の拠点となる「ラ・ソシアル」というクラブをメキシコ市に創立し、「職人組合」や「繊維組合」の結成に貢献した。「ラ・ソシアル」では1872年から1873年にかけて『共和国』を執筆した<sup>45)</sup>。1879年11月にはモルモン教に改宗したが、ロダカナティが信者を社会主義のプロジェクトに参加させようとしたために両者の関係は悪化し、ロダカナティはモルモン教から離脱

した<sup>46)</sup>。1886年(58歳)にヨーロッパへ戻ったが、モルモン教徒の口承記録によれば、1890年代にメキシコに戻ったと言われる<sup>47)</sup>。

ロダカナティの思想を理解するには、著書の『社会主義読本』(以下、『読本』と省略する)を読み解くのが早道であろう。『読本』は全9課から構成され、問答形式で書かれている。序文は「18世紀前、イエスの教えを説いた12使徒の雄弁で高貴な声を聞くと、人類は感動するが、その教義は社会主義である」と始まり、「この小冊子はメキシコの労働者と農民階級に社会主義に依拠する真の科学原理を理解してもらうため執筆された」と続き、「メキシコ国民がいつの日か金権政治の恐ろしいくびきから共同体を介して解放されることを希求する」と結ばれている<sup>48)</sup>。第1課のテーマは社会問題で、個人と民衆による普遍の共同体の実現を主張し、第2課では、人間は生来悪ではなく、社会制度の不備によって悪に染まるという見解を展開する。第3課では、かつて人類史において一度も実現されたことのない社会主義に依拠する社会を建設し、それは、村、町、国家、全大陸を包含する地球上の全民族に受け入れられるべきであると説き、第4課では、社会主義学派はどのような政府の権威や意見にも依存せず、それどころかあらゆる政府や政党を超越する権威に賛同すると力説し、第5課では、秩序と自由の条件に関して、教義を押し付けず、実践的、地域的試みを推奨する。第6課では、法と社会改革に触れ、倫理的、物理的に自由への抑圧的強制を人間に押しつける法は、秩序を維持する目的としては、存在理由が失われると説く。第7課では、フーリエは、悪の根絶、善の規則的生産、秩序の絶対的保障の問題を解決するために、自由について思索し社会的関係の連帯を決定する作業に従事し、自由と人間の感情は常に秩序の維持に関係すると、述べる。第8課では、秩序と自由の絶対的關係と結合について語り、最も不完全な虚偽的社会形態は、秩序と自由の間に最大の非互換性を作り上げることであり、最も正当で完璧な社会形態は、秩序と自由の間に最大の互換性を確立することであると断言する。第9課では、フーリエと彼の弟子たちは、人間関係を連携させるために新しいメカニズムを社会に提案するとき、われらは新機械を発明する技師のポストを占めるのか、という問いに対して、われらは社会的技師であり、彼らは独自の新しいメカニズムを現代人に示したと答え、秩序と自由の新しい規定は、いつかあらゆる不完全で矛盾した規律上の法を取り換えるだろうと予言した。そして社会的悪のメカニズムを暴力的に破壊する要求は控えると明言している<sup>49)</sup>。

『読本』に一貫して流れる思想は、社会主義によって生み出される自由と秩序が調和的關係を保つ理想的共同体(ファランジュ)の創出である。ロダカナティは平和と秩序の構築を願い、土地の自由な開発と農業社会創設に賛同した。そして人間搾取に反対し、調和の普遍的共和国の再建設を推進した。ロダカナティは断固たる社会主義建設者であり、宗教は尊重するが教会と司祭は農民の敵であると考えていた。そのためにはあらゆる政府や政党を超越し、フーリエが提唱する正当で完全な社会形態を実現させる必要性が不可避と唱える。直接的にメキシコ政府を打倒すべきという過激な表現はないが、序文で言及しているように「金権政治の恐ろしいくびきからの解放」はメキシコ政府に対する痛烈な批判である。ロダカナティは政府の打倒よりもファランジュの創設を重視した。ファランジュが創設され社会制度が改善されれば、生来善なる人間は悪から脱却できると考えた。バラデスが指摘しているように、ロダカナティの目標は大衆の反乱ではなく、フーリエの社会主義に啓発された選別された社会集団の組織化にあった<sup>50)</sup>。暴力的破壊に懐疑的であったことを勘考すると、無政府主義者というよりフーリエ主義的社会主義者である。

では、ロダカナティのフーリエ主義はロベスにどのような影響を与えたのであろうか。その影

響は、第3節で引用した68年4月20日の「世界のあらゆる被抑圧者と貧困者への宣言」（以下「貧困者への宣言」と省略する）に明白に表れている。「われらは社会主義を望む。これは社会的共存の最も完璧な形態である。自由、平等、博愛の揺るぎない3理念を包含する真実と正義の哲学である」や「われらは専制的あらゆる政体を廃止し、博愛と互助の社会に生き、調和に満ちた普遍的共和国を確立する」という表現は『読本』の言葉そのものであり、搾取された貧しいペオンであるロペスが農民の権利を尊重する社会主義に強く共感し、普遍的共和国建設を望んでいたことがわかる。だが、「血を賭した闘いに出向こう」や「追跡され蜂の巣にされるかも知れないが何ほどのことか」のような政府転覆を目論む過激で戦闘的表現は『読本』にはない。とすれば、このような過激な言い回しは誰の影響であろうか。ラ・ソシアルでは、ロダカナティは理論派だが、サラコスタは行動派であり、無政府主義者として革命のために暴力も容認していた<sup>51)</sup>。また、サラコスタはメキシコにおける「インターナショナル」の創設に関わり、書記を務めていたことを考えれば<sup>52)</sup>、ロダカナティとチャルコに赴き、「光と社会主義」学校を率先的に運営したサラコスタの影響が大きいと思われる。サラコスタはロダカナティからフリーエ主義だけではなく、ブルードンやバクーニンの無政府主義の教えも受けていた。ガルシア・カントゥもロダカナティは彼の弟子のサラコスタのような激しい行動派の無政府主義者ではなくキリスト教的社会主義者と見なしている<sup>53)</sup>。フリーエとブルードンは、自由な個人の連帯と協同に基づく交換を基本とした秩序を想定したが、両者の思想は国家の存在、教会の意義、所有の概念について根本的違いがあった。フリーエは新キリスト教的社会主義を信奉し、社会本位の所有を認め、目的達成には革命的暴力を否定し説得を採用するが、ブルードンは宗教における神、政治における国家、経済における所有を拒否すべきと<sup>54)</sup>、主張する無神論者且つ、無政府主義者であり、また、土地の不平等な占有権に基づく所有否定論者である。ブルードンから思想的影響を受けたバクーニンはブルジョア文明と国家の破壊のなかから新しい世界が誕生するという過激なアナキズムを提唱した<sup>55)</sup>。ロダカナティとサラコスタは師弟関係にあったが、両者間には思想的乖離があった。ロダカナティはフリーエを信奉し、サラコスタはブルードンとバクーニンの思想に傾倒した。この二人の齟齬こそ、ロダカナティがチャルコを去った原因ではないのか。そして「光と社会主義」学校の運営を任されたサラコスタの影響を受け、反乱に向かうのがロペスである。そう考えれば、「貧困者への宣言」における過激な表現や痛烈な教会批判も理解できるのである。サラコスタはロペスの反乱が鎮圧された後も、メキシコ各地を訪ね、地元の農民リーダーと関係を築くとともに、「コムニオン中央委員会」の創設に関わった。1879年、無政府主義を標榜し社会主義政府の樹立と農民議会の創設を掲げる「バランカ計画」の起草に参加した<sup>56)</sup>。このようにメキシコにおける無政府主義の中心的存在はサラコスタと言えるのである。

ロペスはロダカナティ一派がチャルコに移動した1865年からおよそ2年間の指導で社会主義思想を学び、1867年末に最初の「宣言」を発表した。そして最初の「宣言」とはかけ離れた過激な「貧困者への宣言」が投降後わずか2か月で発表されたのは、穏健派のロダカナティがチャルコを去り、無政府主義者のサラコスタが「光と社会主義」学校の指導者となったからであろう。サラコスタの関与に関しては残された史料が限られているので、サラコスタのロペスへの影響の程度については実証できないが、ロペスの2か月間での急激な変貌にはロダカナティの去就が大きく関連していると推測する。さらに2か月という短期間で体系的国家・社会批判が記された「貧困者への宣言」がロペスに執筆できる可能性は低い。恐らくロペスが大まかなアイデアを盛り込んだ

素案を練り上げ、サラコスタと他のロダカナティの弟子たちがその素案を添削し最終的に「貧困者への宣言」を仕上げたのであろう。あるいは「貧困者への宣言」を執筆したのはサラコスタたち都市のインテリで、彼らに感化されたロベスは単に「宣言」を公表しただけかも知れない。フリーエとブルードン・バクーニンの思想がロダカナティとサラコスタを介して透明化された「貧困者への宣言」に提示され、あらゆる政府を抑圧者であると非難し、また、あらゆる政体への反対が表明された。

チャルコが農業コロニーの実践地として、また「光と社会主義」学校の建設地として選ばれた理由は判然としませんが、ロダカナティの活動拠点はメキシコ市だったので、市の近郊という地理的要因、もうひとつは、フリーエのファランジュ適地論に従ったのであろう。フリーエは、理想的には、ファランジュは1平方里の敷地をもつ小高い丘が望ましく、そこは水が豊富で、土壌や気候は広範な種類の作物を栽培するのに適していたほうがよいと考えていた<sup>57)</sup>。ロダカナティにとって、チャルコこそフリーエが提示した理想郷建設に適合した土地であったと、考えられる。ロダカナティは1876年の「ラ・ソシアル再結成」における演説で、地域銀行を創設して土地分配の円滑化を図り、先住民の生活を改善する農業法の制定を強く望んでいた<sup>58)</sup>。また、人間は自然状態の原始の源を忘れ、摂理の使命から外れ、家族を結びつける平等を認識せず、人類の大家族の連帯の絆を破壊し、原始的平等を忘れ不公平な分配の所有という愚かな理論に変えた<sup>59)</sup>、原始的共産社会こそ人類のあるべき姿だと強調している。この思想は、先住民中心の秩序が保たれた集団的農業コロニーである“偉大なテノチティトラン（アステカ族の都）を新エルサレムに変える”という表現にも表れている<sup>60)</sup>。1878年1月1日の新年の祝宴でロダカナティは、社会主義の導入は、愚かで無能な政府や利己的階級が存在や社会の抑圧にもかかわらずメキシコの運命を変えると、演説した<sup>61)</sup>。ロダカナティは、集団は社会関係の基礎的形態であり、完全に自由な結合から構成される調和集団こそ健全な社会であると言うフリーエの教えを実践しようとした。

## 結語

チャルコは古来より豊かな水資源、豊饒な土地、交通の要路という恵まれた環境にあった。その豊かさゆえに外来者を引き付け、地元民は紛争に巻き込まれた。先スペイン期から居住する先住民農民はスペイン人植民者と植民地期には対立し、独立以降はアセンダドとの土地・水・牧草地の所有を巡って熾烈な闘いを強いられた。植民地時代より新国家建設以降に農民反乱が急増した原因のひとつは農民、アセンダド、政府の3者間の均衡が崩れたからである。植民地時代の農民とアセンダドの土地紛争には政府や裁判所が介入し、調停者としての役割を果たしていたが、独立以降はアセンダドの利益を政府が代弁し、調停者の役割を捨て、農民を抑圧する側に回った。均衡していた三角形が歪な2極間関係に変質したのである。新生メキシコ国家は、建国当初から農民共同体を解体し土地の流動化を図ろうとしたが、為政者たちの権力闘争が国家を弱体化し、自由主義的土地分配を実現できなかった。だが、フアレスが改革戦争に勝利を収め、その後干渉してきたマキシミリアン帝政を打倒し、実質的に国家を統一すると、自由主義的改革が断行され、農民共同体の私有化がレルド法によって実施された。レルド法に異議を唱える農民反乱がメキシコ各地で勃発し、チャルコも例外ではなかった。その反乱を率いたのがフリオ・ロベスである。農民反乱の指導者は概して地方のカウディージョや軍人や自由主義者が多いが、ロベスはメキシ

コの身分社会では最下層に属するペオン（小作人）である。そのような貧しい農民であったが、ロダカナティと彼の弟子たちの影響を受け、フアレス政権に対して無謀ともいえる武装蜂起をした。チャルコの反乱はロペスの処刑で幕を閉じたが、ディアス政権でも他地域では農民反乱が続く、やがてそれは20世紀初頭のメキシコ革命へとつながる。ロペスに思想的影響を与えたロダカナティは無政府主義者というよりキリスト教的社会主義者である。ロダカナティはヨーロッパでフーリエ、プルードン、バクーニンの思想を学んだが、彼の著作や言動から判断すると、政府の転覆を画策する無政府主義者ではなく、フーリエが考案したファランジュの建設を目指す社会主義的共同体主義者である。ロダカナティのロペスへの思想的影響力は計り知れないが、ロペスに革命的反乱の考え方を伝授したのはサラコスタであろう。サラコスタは彼の言動からフーリエ的共同体主義者というよりむしろプルードンとバクーニンを信奉する無政府主義的行動派であった。本稿は、サラコスタに感化されたフリオ・ロペスが2回目の反乱を起こしたと推測する。

## 注

- 1) ガルシア・カントゥは正式名を「フリオ・ロペス・チャベス」としているが、本稿では呼称化された「フリオ・ロペス」を用いる。
- 2) Tutino (1990), p.103
- 3) Tortolero Villaseñor, p.23. ロペスは社会主義者でも無政府主義者でもなく、烏合の衆であった農民兵たちを騎馬の武装集団に一新した農民リーダーである。彼は土地、水、牧草を住民へ回復する要求に依拠し、村の土地を強奪しようとするアセンダドの攻撃を抑制するために当局と折衝できる農民運動を組織化した例外的に辣腕の農民であった。
- 4) メキシコで初めて自由の真の勝利のために政府の廃止が叫ばれた。Valadés, 1924
- 5) Tutino (1990), p. 139. トゥティノはリバ・パラシオ文書館の史料の調査に依拠して、バラデスが1869年としたロペスの反乱を1868年に訂正した。だが、トゥティノはロペスの署名入り文書「メキシコ並びに世界のすべての非抑圧者と貧困者への宣言」の存在には言及していない。
- 6) Palerm, p.192-193. アステカ族が埋め立て手段として採用したチナンパ（水上農園）はチャルコ地方に由来する。
- 7) Jalpa, p.23
- 8) García Icazbalceta, p.184
- 9) Actas de cabildo, lib.6, p.499, lib.7, p.144
- 10) Jalpa, p.32
- 11) Bora, p.15, p.17. バルドビノスはメキシコ盆地の先住民の人口変動を以下のように算定した。征服直後の150万人は1570年には325,000人に減少し、17世紀半ばには70,000人にまで激減した。1742年に120,000人に回復し、1800年には275,000人に上昇した。Valdovinos (1993), p.269
- 12) Tutino (1990), p.99
- 13) Artés Espriu, pp.203-205. 残り3村の人種構成については不明。
- 14) Rodríguez, p.81, pp.123-125
- 15) Semo, p.23
- 16) Valdovinos (1990), p.59
- 17) Ibid., p.62
- 18) 知事が軍隊の派遣を躊躇したのは、政府が米墨戦争への軍隊派遣を優先していたからである。



Arizcorreta, 1849

- 19) Anaya Perez, p.71. 1833年, チャルコでコレラが流行したが, 疫病による人口減は農民にエリートとの交渉力を高めた。月曜日に働かないペオンに賃金を払うのは不正義だが, そうでもしないと人手が集まらなかった。
- 20) Tutino (1993), p.373. 1794年 35,634人, 1800年 38,804人, 1870年 47,184人, 1877年 54,940人, 1890年 64,113人, 1900年 70,192人。1800年から1870年の70年間に20%しか人口は増えていない。
- 21) Ibid., pp.106-107
- 22) Ibid., p.122
- 23) Reina, pp.157-170
- 24) Falcón, p.1011
- 25) Anaya Pérez, p.100
- 26) Tutino (1990), p.113
- 27) Powell, pp.116-117
- 28) Ibid., p.144
- 29) 山崎, pp.110-115
- 30) Anaya Pérez, pp.98-99
- 31) Valdovinos (1990), pp.125-127
- 32) Falcón, p.1036
- 33) Reina, pp.66-67
- 34) Tutino (1990), p.124
- 35) García Cantú, pp.58-61. ロベスが銃殺されたのは1868年7月9日であることは史料によって明白なので, 文書の日付, 1869年4月20日は1868年4月20日に訂正されている。Valdovinos(1990), p.136, Anaya Pérez, p.116
- 36) Reina, pp.67-71, ADN, Exp.XI /481.4/9750
- 37) Tutino (1990), p.134
- 38) バラデスはロベス軍を1,000人(Valadés, 1924), ディアス・ラミレスは1,500人としているが(Díaz Ramires, pp.69-70), ロベスの軍勢は最大でも100名ほどであろう。
- 39) Faure, p.201
- 40) García Cantú, p.146
- 41) Valadés (1970), p.11
- 42) Valdovinos (1993), p.285. 「植民者用に100区画に分割した11,000エーカーをメキシコ人あるいは外国人に付与し, 後者には一連の免税を与え, 区画を申請時にメキシコ人と見なす(1856年7月11日)」
- 43) Hart (1980), p.32. ロダカナティがいつチャルコに移ったのか研究者によって時期が異なる。ハートは1865年1月, アナヤ・ベレスは1868年3月(Anaya Pérez, p.117)としているが, 1868年では, ロベスは「光と社会主義」学校で学ぶ時間はほとんどなかったことになる。ロダカナティが1865年初めに移り, 労働運動で挫折したサラコスタらの弟子たちが1865年11月に合流したと考えるのが合理的であろう。また, ロダカナティは1865年にサラコスタ宛の書簡で雄弁に演説する青年フリオ・チャベス(ロベス)について触れている。(Hart, 1974, p.55)
- 44) Pani, p.159
- 45) Illades, pp.76-79
- 46) Ibid., p.100
- 47) Ibid., p.129

- 48) Rhodakanaty, pp.9-11
- 49) Ibid., pp.15-58
- 50) Valadés (1970), p.35
- 51) Illades, p.88
- 52) García Cantú, p.423
- 53) Ibid., p.176
- 54) 佐藤, p.11 「アナルシー, 主人, 最高権者がいないこと, こうしたことこそ, 日々われわれが近づいて行っている政体のかたちなのだ」。p.251 「宗教における神, 政治における国家, 経済における所有, これこそ人類が, それによって自分自身にたいして他人になり, たえず, 自らの手で自己を引きさき続けてきた三つの形態なのである。このようなことは, 今日では拒否されねばならない」。
- 55) バクーニン, p.27 「いま一つは, 労働者は, 憎むべき, 多年の羈絆を, 最終的に振りおとし, プルジョアの搾取と, これにもとづくプルジョア文明を根本から破壊するかということである。このことは, 社会革命の勝利, 国家と呼ばれるものすべての破壊を意味する」。p.36 「広範で熱情的な破壊, 有益で成果のある破壊がなければ, 革命はありえないからであり, ほかならぬこの破壊のなかから, また破壊を手段として, 新しい世界が誕生し, 発生するからである」。
- 56) Illades, p.88, pp.112-113
- 57) ビーチャー, p.214
- 58) Rhodakanaty, p.65
- 59) Ibid., p.60
- 60) Illades, p.96
- 61) Rhodakanaty, p.76

## 参考文献

ビーチャー, ジョナサン (Beecher, Jonathan)

- 2001 『シャルル・フーリエ伝—幻視者とその世界』 (Charles Fourier, The visionary and his world), 福島知己訳, 作品社。

バクーニン, ミハイル (Bakunin, Mikhail)

- 1970 『バクーニン I』, アナキズム叢書, 石堂清倫, 勝田吉太郎, 江口幹訳, 三一書房。

佐藤茂行 (Sato, Shigeyuku)

- 1975 『プルードン研究』, 木鐸社。

山崎眞次 (Yamasaki, Shinji)

- 2011 「アリカの虎, マヌエル・ロサダの反乱 1」 (The Rebellion of Manuel Lozada, the Tiger of Alica 1), 早稲田大学政治経済学部『教養諸学』, 130号。

*Actas de cabildo, lib.6, lib.7*

- 1988 México, DF.

Anaya Pérez, Marco Antonio

1997 *Rebelión y Revolución en Chalco-Amecameca, Estado de México, 1821 – 1921, T.I, Chalco 1868 ¡viva el socialismo!*, Universidad Autónoma Chapingo.

Artís Espriu, Gloria

1993 “La tierra y sus dueños: Chalco durante el siglo XVIII”, Tortolero, Alejandro, *Entre lagos y volcanes, Chalco Amecameca: pasado y presente*. Volumen I, pp.195 – 225, El Colegio Mexiquense, A.C.

Arizcorreta, Mariano

1849 *Manifestación que hace el C.Mariano Arizcorreta contra la comunicación dirigida a los propietarios de fincas rústicas.*, LAF.

Borah, Woodrow

1982 *El siglo de la derpresión en Nueva España*, Era.

Díaz Ramírez, Manuel

1979 *Apuntes sobre el movimiento obrero y campesino*, Ediciones de Cultura Popular, México.

Falcón, Romana

2005 *El Estado liberal ante las rebeliones populares, México, 1867 – 76*, Colegio de México.

Faure, Sebastián

1972 *Enciclopedia Anaquista*, T.I. Tierra y Libertad, México.

García Icazbalceta, Joaquín,

1941 *Nueva colección de documentos para la historia de México. Cartas de religiosos de Nueva España*, Chávez Hayhoe.

García Cantú, Gastón

1969 *El socialism en México siglo XIX*, México, Era.

Hart, John Mason

1978 *Anarchism & the Mexican working class, 1860 – 1931*, University of Texas Press.

1974 *Los anarquistas mexicanos 1600 – 1900*, SEP.

Illades, Carlos

2001 *Rhodakanaty y la formación del pensamiento socialista en México*, UAM.

Jalpa Flores, Tomas

2008 *Tierra y sociedad, La apropiación del suelo en la región de Chalco durante los siglos XV-XVII*, INAH.

Palerm, Ángel

1973 *Obras hidráulicas prehispánicas en el sistema lacustre del valle de México*, SEP-INAH.

Pani, Erika

2004 “Reseña de Rhodakanaty y la formación del pensamiento socialista en México de Carlos Illades”, *Signos Históricos*, enero-junio, número 011, pp.158 – 163, Universidad Autónoma Metropolitana-Iztapalapa.

Powell, T.G.

1974 *El liberalismo y el campesinado mexicano en el centro de México, 1850 a 1876*, SEP.

Reina, Leticia

1980 *Las rebeliones campesinas en México, 1819 – 1906*, Siglo XXI, México

Rhodakanaty, Plotino

1976 *Escritos*, Centro de Estudios Históricos del Movimiento Obrero Mexicano, México.

Semo, Enrique

1977 *Siete ensayos sobre la Hacienda Mexicana 1780-1880*, SEP-INAH.

Tortolero Villaseñor, Alejandro

2009 “¿Anarquistas, ambientalistas o revolucionarios? La conflictividad rural en Chalco. San Francisco Acuautila contra Zoquiapa, 1850 – 1868”, *Revista de Historia*, No.59-60, enero-diciembre 2009, pp.15 – 34, Universidad Nacional y la Universidad de Costa Rica.

Tutino, John

1988 “Agrarian social change and peasant rebellion in nineteenth-century Mexico: The example of Chalco”, Katz, Friedrich, *Riot, rebellion and revolution. Rural social conflict in Mexico*, pp.95 – 140, Princeton University Press.

1993 “Entre la rebelión y la revolución: comprensión agraria en Chalco, 1870 – 1900”, Tortolero, *Entre lagos y volcanes Chalco Amecameca: pasado y presente*. Volumen I, pp.365 – 412, El Colegio Mexiquense, A.C.

Valadés, José

1924 “La insurrección de Chalco (mayo 1869)”, *La protesta (Suplemento mensual)*, Buenos Aires, 1 de mayo de 1924.

1970 “Cartilla Socialista de Plotino C. Rhodakanaty, Noticia sobre el socialismo en México durante el siglo XIX”, *Estudio de Historia Moderna y Contemporánea de México*, V.3, pp.8 – 66, Instituto de Investigaciones Históricas.

Vázquez Valdovinos, Ernesto

1990 *La rebelión agraria de Julio López Chávez en el México del Siglo XIX*, UNAM.

1993 “¿Anarquismo en Chalco?” Tortolero, *Entre lagos y volcanes Chalco Amecameca: pasado y*

*presente*. Volumen I, pp.265 – 300, El Colegio Mexiquense, A.C.

新聞・雑誌

*El Globo*/febrero, marzo, junio y julio de 1868

*El Monitor Republicano*/marzo y junio de 1868

*El Siglo XIX*/abril y junio de 1868

*La Opinión Nacional*/junio de 1868

*La Revista Universal*/junio de 1868

